

2005 年 12 月 15 日

ユニセフ*コープ ネットワーク

ほむ・ほむ通信

No. 30

ユニセフスリランカスタディツアー PHOTO REPORT

2005 年 10 月 1 日 (土)~10 月 8 日 (土)まで、スマトラ沖地震・津波の被災地であるスリランカを視察しました。視察地はスリランカ南部のゴールとマタラです。スリランカ南部では約5,000 人が津波によって亡くなっています。津波から10 ヶ月。被災地のいまをご紹介します。



コロンボからゴールまでにむかう沿岸の道。海のそばにある建物は損壊するなどの被害を受けているものが多い。現在、海岸から 100m 以内は緩衝地帯として家の再建ができない状態となっているため、沿岸に住んでいた漁業民などがまだ住む土地が決まっていません。



マタラにある避難キャンプ。学校の敷地内にあるこのキャンプは、津波から 1 週間できあがり、当初は 80 家族が住んでいました。今は、10 テントに 40 家族が住んでいます。キャンプ内のトイレやシャワールームはユニセフが支援しています。



8 月から使用されはじめた仮設住宅。仮設住宅ができると人々はテントのキャンプからこちらに移ります。木造 1 棟が 4 つに区切られていて、世帯毎に暮らしています。住民による運営委員会が仮設住宅内の清掃分担や職業復帰のための支援、若者や子どもへの支援を行っています。



避難キャンプでは、子どもたち（ひいては大人も）を元気づけるための人形劇が実施されていました。人形劇には「食事の前には手を洗いましょう」などの日常生活に役立つ知識も盛り込みながら、スリランカの伝統的な音楽や踊りを楽しんでもらっています。

ユニセフスリランカスタディツアー PHOTO REPORT



避難キャンプ内に設置された補習教室。放課後、子どもたちはここに集まって、国語や英語、算数、音楽、ダンスなど年齢別に学ぶことができます。ユニセフは2年間の運営費とスポーツ用具を提供しています。



仮設校舎で学ぶ子どもたち。ユニセフが再建する新しい校舎ができるまでは、トタン屋根で、壁のないこの校舎で授業が続けられます。



ユニセフの支援で再建される学校は「子どもにやさしい学校」として、子どもや地域の意見を反映させ、子どもを中心にいた授業が実践され、子どもたちの健康的な発達にも配慮した学校になります。来年には2階建ての校舎が完成する予定です。



新しく建設中の保健センター。妊産婦や乳幼児の定期検診や予防接種などが行われます。古い建物は雨漏りがし、部屋が狭くて少なく満足な診療が行えませんでした。

スタディツアー参加者による報告会が開催されています

コープこうべでのスタディツアー報告会は、10月13日に、約600人の幹部職員が出席する会議で厚東清子さんが、そして10月19日からスタートした地区別総代会議(兵庫県内6会場)では、綿野孝子さんから、全体で約900人の総代に対して、被災地の状況とユニセフによる支援活動についての報告が行われました。

コープかながわでも、10月22日に安藤素子さんによる報告会が開催されました。当日は9月に開設した神奈川県支部のボランティアも参加していました。今後も、各地域の委員会に開催が呼びかけられています。



写真右上：厚東さん、右下：綿野さん
写真左：安藤さん



パキスタン地震緊急募金

2005 年 10 月 8 日にパキスタン北西部を襲った大地震では、73,000 人以上 (11 月 16 日時点) が命を奪われ、被災者が 400 万人にものぼる大惨事となりました。地震は山がちでアクセスが悪く、そして貧困の中で暮らす人々を直撃しました。ユニセフは、保健、栄養、シェルター、水と衛生、教育、子どもの保護などの分野での支援に 9250 万ドル (約 106 億円) が必要であると国際社会に訴えています。(10 月 26 日時点)

ユニセフの主な活動

保健

- ・医薬品を含む緊急保健キット、保健サービスに必要な資材等の提供
- ・緊急予防接種および定期予防接種実施のためのワクチン、注射器などの提供と保健員への支援、調整業務

栄養

- 子どもたちの栄養状態調査と栄養支援の計画・調整、子どもと妊産婦へのビタミン A 補給

水と衛生

- ・飲料水の提供
- ・不衛生な環境による危険を軽減させるための衛生施設 (トイレなど) の設置

子どもの保護

- ・子どもと女性への心理的ケア
- ・親を失った子ども、家族 (または保護者) とはぐれた子どもの調査、保護、再会支援
- ・学校などを利用した「子どもに優しい空間 (子どもが安心できる場所)」の設置

教育

- ・学校再開支援 (学習教材の提供、教員への支援など)
- ・小・中学校の再建

その他

- 子どもとその家族への毛布、衣類、ブーツなど生活必需品の提供

お手製のペットボトル募金箱でパキスタン地震緊急募金を呼びかけ！ - いわて生協 -

いわて生協では、県内 100 店舗のレジ台に右の写真のようなペットボトル募金箱をとりつけて募金を呼びかけると同時に、共同購入でも募金を呼びかけています。

このペットボトル募金箱には、なんと1万円札が入っていました。スマトラ沖地震・津波緊急募金では通常せいぜい数万円の募金のところ、ペットボトル募金箱で 80 万円ぐらいいました。ボトル募金は金がかからない上、場所を取りません。レジ台の上に両面テープをつけて、簡単に取り外しできます。夜にはレジ台からはずし、金庫かレジのキャスターに入れます。翌朝又設置。5000 円から 1 万円さつなど入っていたらすぐに入金します。防犯対策も大切です。カラフルなボトル募金がレジ台に並ぶとカッコも良いです。

いわて生協 川崎さん
情報提供ありがとう
ございました！)



募金箱

この国 どんな国 ベトナム社会主義共和国の巻

ベトナムの略史



1883 年 仏の植民地化。

1945 年 ベトナム民主共和国成立。

1949 年 ベトナム国 (親仏) 成立。

1954 年 ジュネーヴ協定により南北分割。

1955 年 南部で共和制成立。

1965 年 米軍直接介入開始。

1973 年 パリ和平協定。

1975 年 南越崩壊。

1976 年 南北統一 (社会主義共和国)。

1986 年公式に導入されたドイモイ(改革・開放)は、先例のない経済成長と貧困消滅の時代をもたらしました。

国内総生産 10 年ではほぼ 3 倍

一人当たりの所得 ほぼ 500%まで上昇

貧困率 1985 年 70%→2004 年約 24%までに劇的に低下

乳幼児死亡率 1993 年 1,000 人当たり 44.2 人→2003 年 21 人

5 歳未満児死亡率 55.4 人→32.8 人に低下

子どもの栄養不良は過去 20 年の間に 50%まで低下し、

ベトナムの 20 年間は他のどの国よりも高い減少率です

しかし生活水準の改善は貧困層にはもっとゆっくり反映。困難な状況にある人々と恵まれた人々の間には格差が上昇しています。

ベトナム指定募金 (日本生協連の取り組み)

指定募金は募金の対象国とその国の特定プロジェクトを指定する募金でベトナムに対しては中央地連管内 17 生協と九州地連管内 5 生協により 1995 年より開始されました。1995 年から 5 年間は「貧しい農村女性のための収入向上、生存の知識普及」 2001 年から 3 年間は「家族とコミュニティーによる乳幼児発達のためのケア」の 2 つのプロジェクトを支援しました。国の経済向上も手伝い成果を上げることができたこの指定募金は 2003 年に終了。

家族とコミュニティーによる乳幼児発達のためのケア プロジェクト

<本プロジェクトで伝えているメッセージ>

乳幼児ケアとは何をするのか(すべてのこどもが平等に扱われること・親や養育者が日常生活の中で多様な刺激をあたえること・地元の資源で作れる安くてこどもの好奇心を満足させる玩具の作り方・男性も育児に参加すること) こどもにやさしい幼稚園とは ニーズや年齢に応じ、こどもが自分自身で考え表現できるようなこどもを中心としたカリキュラムを提供している。など

<ユニセフのとっている手法>

草の根レベルまで効果的に幅広くメッセージを伝え実践させるため以下のような活動を行っている。

伝えるメッセージの作成 実態の調査や関係者へのヒヤリングを通しながら、専門家が効果的なメッセージ、教材を作成する。

政策決定者、行政関係者への啓蒙活動 (環境作り) 政策レベルでの推進と担当者の理解を深める。

トレーナー研修 (実践)

郡や省のレベルでリーダーとなるトレーナーに研修を行い、そこからは研修をうけたトレーナーが各地域で草の根レベルまで知識を伝え 実践に移せるようにする。 (山本直子)



幼稚園で楽しそうに遊ぶ



コミュニケーションゲーム



キャンペーンロゴ



作成された絵本の表紙



世界の子ども達は今

ベトナム社会主義
共和国

「家庭とコミュニティによる乳幼児発達のためのケア」プロジェクト



ユニセフ職員によるトレーナー研修



< 学校への支援 >

草の根レベルまで届くように、トレーナーたちが、幼稚園の先生や親へのメッセージを届ける広報官を研修します。

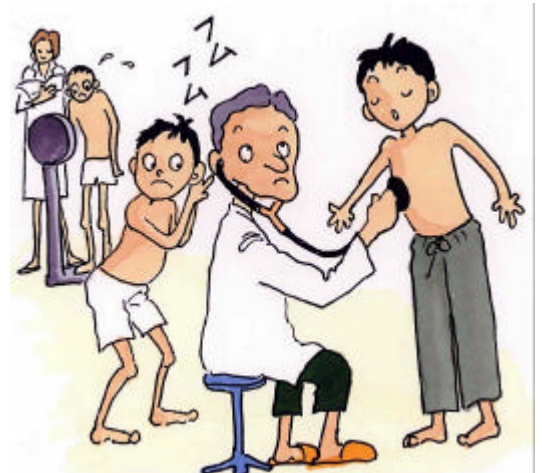


< 地域では > コミュニケーショングループの
会合、子どものケアや発達について情報交換

- ・ 0～8 才までの時期は、子どもの脳・身体・社会・感情面での発達にとって非常に大切な時期。
- ・ 対象地域では、保健や教育サービスがなかったり、厳しい生活環境や貧困の中で親たちが子どもの世話をする時間がありません。
- ・ 農村部においては、特に乳幼児発達についての十分な知識を持った人材がいない状況です。

(文) 松本真弓 / (絵) 蛭沢素子

< 幼稚園では >



FGM 廃絶を支援する女たちの会 (WAAF) 設立 10 周年記念国際シンポジウム報告 ～FGM 廃絶の現場から—国境を越えた連帯—

● FGM とは何か？

FGM (Female Genital Mutilation: 女性性器切除) は、アフリカ、中近東、アジアの一部などで、女兒の通過儀礼として古くから行われてきました。対象は生後 1 週間の赤ちゃんから初潮前の少女で、最も多く行われているタイプとしてはクリトリスと小陰唇の一部、または全部の切除をするものです。施術は一般的に、土地の伝統的助産婦によって麻酔も使用せず、多くの場合十分な消毒もしていない剃刀等を使って行われ、激しい痛みでショック状態に陥ったり、出血多量や感染症などで死に至る場合もあります。施術後の後遺症も深刻であり、貧血、月経困難症、失禁、性交時・出産時の激痛などの身体的症状から、性行為への恐怖、鬱症状などの精神的ダメージまで、女性の人生に多大な影響を与えることがわかっています。FGM を行う理由は様々挙げられていますが、結婚に備えて純潔・貞操を守らせるため、性や出産に関する現地の言い伝えなどが大きく関わっています。

● 人権侵害・暴力という認識と国際的な取り組みの始まり

国連の発表によれば、毎年 200 万人、毎日約 6000 人の女兒/女性が性器切除され、これまでにアフリカだけで 1 億 3000 万人がこの慣習の犠牲になっていると言われています。1980 年代にアフリカの人々が立ち上がって声を上げ始め、1990 年代になると、国連での様々な会議に代表される国際的な FGM 廃絶キャンペーンが行われるようになりました。その結果、FGM は女性に対する暴力、女性のリプロダクティブ・ライツ(性と生殖に関する自己決定権)の侵害であると、¹⁾ 防止という認識が広くなされるようになり、その廃絶のために FGM 実施国の取り組みと国際的な支援が求められるようになったのです。

● 私たちの体は私たちのもの

国際シンポジウムでは初めに、WAAF の創設者で元代表のヤンソン柳沢由美子さんからの基調報告がありました。ヤンソン柳沢さんは 70 年代の女性運動に関わる中で、「私たちの体は私たちのもの (Our Bodies, Ourselves)」という女性の自己決定権を尊重する思想に出会いました。「『女性の体は女性自身のものであって、国家、法律、宗教、男性との力関係で決められるものではない』という思想こそ、わたしが FGM 廃絶支援の運動を起こしたバックボーンになっているものです」とヤンソン柳沢さんは言います。よく聞かれるという「なぜ遠いアフリカの問題に取り組むのか」という質問や「FGM は彼らの文化であるから介入すべきでない」という主張にも、国や民族の違いを超えて、女性としての痛みを共有する立場から立ち向かっています。

● アフリカの人々による活動

今回のシンポジウムには、アフリカ最大の FGM 廃絶団体 IAC のリンダ・オサレンレンさんと、2003 年度に WAAF の反 FGM 基金の支援を受けたケニアの女性団体からリリアン・ブラバンさんが来日して報告をされました。反 FGM 基金は、アフリカの各地で FGM 廃絶のために活動している団



体を支援する目的で設立されたもので、1997 年から今年まで毎年 1 団体に対し 5000 米ドルの助成金が供与されています。お二人は、地域コミュニティや政府からの反対や不十分な資金、人的資源などの問題を抱えながらも、FGM の害や女性の人権についての考えを示し、人々を動かし、また FGM の存続を支えている男性の意識を変えていくという活動を続けているということでした。FGM を受けていない女性とは結婚できないという偏見が蔓延する中、FGM は女性の人権侵害だと認識した男性たちが、FGM を受けていない自分の妻を誇りに思うというプラカードを持ってデモ行進を行ったというエピソードもありました。

● ユニセフの取り組みと姿勢

ユニセフは、FGM という慣習の危険性を認識し、FGM の防止に関する情報提供、教育、コミュニケーション、女性の地位向上などの活動に取り組み、特に若い世代への意識啓発に取り組んでいます。元ユニセフソマリア事務所の中井裕真さんは、FGM はそれを受けた女兒自身に害を与えるだけでなく、彼女たちが子どもを産めない体になってしまった場合、それは未来の子どもへの影響もあると言える、と長期的な視点から FGM の害を指摘していました。FGM を受けていない女性との結婚を拒否した欧米生活の長いソマリア人の男性のエピソードも紹介され、FGM が彼らの結婚観に及ぼしている影響の根深さを感じました。

● 日本に住む私達の問題でもある FGM

最後に、「FGM は私たちの課題です」と言い切る、ヤンソン柳沢さんの言葉の意味を私たち一人一人が考える必要があります。確かに、私たちの住む日本には FGM の習慣はありません。しかし、FGM が女性の自己決定権を侵害し、自由な行動を束縛する機能を果たしていることを考えると、形は違えども日本にも同じように女性を抑圧する制度や規範が数多く存在しています。結婚していない女性への偏見や差別、ドメスティック・バイオレンスやレイプ、児童買春等の問題は、FGM と根本的な原因は同じです。FGM 廃絶に向けての支援を続けるとともに、日本の私たち自身の問題にも取り組んでいく必要を強く感じました。

(日本ユニセフ協会 インターン 宇佐美茉莉)

コープぎふ「スマトラ沖地震・津波復興支援キャンペーン」の取り組みについて

コープぎふにおける「コープ・ユニセフ スマトラ沖地震・津波復興支援キャンペーン」の取り組みとして、5～6月にかけて重点的に取り組んだ上半期の募金は、約 250 万円の募金を組合員のみなさんからお寄せいただきました。

その際、募金活動を取り組んだ各職場や理事会からは、「募金を集めるのみの活動になっていないか?」「組合員に、もっとスマトラ沖地震・津波の現状を知らせる活動が必要ではないか」「定時（パート）職員が増えているので、職員を対象としたユニセフ活動についての学習が必要ではないか」などの意見が出されました。

こうした指摘を受けて、下半期のキャンペーンでは募金を訴えるだけでなく、「スマトラ沖地震・津波災害」の実情をもっと知ることによって、組合員はもちろん職員全員がユニセフ活動を知り、そして知らせる活動に重点を置く事としました。

具体的には、9月11、15日の2日間、コープぎふの全役職員が参加する「全員集会」の場に、日本生協連と日本ユニセフ協会から講師を招いて、職員を対象とした「スマトラ沖地震・津波災害」の学習会を企画しました。そして、ユニセフ協会製作の「学習ビデオ」を全事業所分ダビングして、それぞれの職場学習会の際に活用しました。



期間中の広報活動としては、全店舗・支所・本部の廊下に、スマトラ沖地震・津波災害の写真パネル（約 20 枚）を掲示し、来店者や来訪者

はもちろん職員にも現状を知ってもらう取り組みを進めました。また、ポスターを配達トラックに積極的に掲示するとともに、日本生協連が作成したカラーチラシを配達時に配付して、現在の復興状況について組合員に対して広く知らせる活動を進めました。合わせて、日本生協連からの情報や、各地域での取り組みを紹介するニュースを随時発行して、組合員への情報提供に努めました。

毎年、秋に開催され多くの参加でにぎわう「岐阜県農業フェスティバル」のユニセフコーナーでは、「スマトラ沖地震・津波災害」のパネル展示をはじめ、スマトラ産コーヒーの販売（供給額の半額は募金へ）や募金活動を取り組みました。



具体的な募金活動については、組合員の募金とともに職員に対しても募金を呼びかけました。また、募金専用封筒を全職員に渡して、職員が家族や知人に対してもユニセフについて語るきっかけとしました。合わせて生協の取引業者にも協力を呼びかけました。こうした取り組みにより、下期の職員および業者関係の募金は約 35 万円を集約しました。

ユニセフカードについては、どんな小さなイベントでも「ユニセフカードコーナー」を設けて、カードの売り上げを「スマトラ沖地震・津波復興支援募金」として計上しました。

こうした各方面に働きかける取り組みを進めることで、上期と比較して「職員全員がユニセフ活動について直接説明を受けることができた」「全事業所でポスター掲示はもとより、写真パネルを掲示し広くお知らせすることが



できた」「発行物を通じて、組合員に随時情報提供がなされた」「多くの職員が自ら募金に参加した」などの前進面を作ることができたのではないかと思います。

11月末現在の募金額は約258万円となっており、目標としている300万円には少し及ばない状況ですが、12月末まで取り組みを強めたいと思います。(コープぎふ水野さんより情報をいただきました)

< 共立社生協の取り組み >

スマトラキャンペーンの取り組みは、パキスタンの地震が発生したため、両方合わせて募金の呼びかけが行われました。具体的には、10月に開催された「つどい(班長会)」で募金の呼びかけがありました。このつどいは、鶴岡では10ヵ所で500名が参加するような規模です。

また、12月の「ハンド・イン・ハンド」の取り組みについては、共立社生協の4地域(鶴岡12/17、酒田12/17、新庄12/1・2、山形)で取り組まれることとなっています。それぞれの地域理事が中心となって準備が進められており、新庄地区では試食会とも合わせた企画が予定されています

(共立社の佐藤さんより情報をいただきました。次号で取り組み報告を掲載する予定です。)

ぽむぽむ広場

ぽむぽむ通信の通算30号をお届けします。全国のユニセフ協力活動の交流誌としての役割はもちろん、世界の国々や子どもたちの様子も積極的に紹介していきます。また、各地の活動の参考になるような取り組みのご案内も行っています。

全国の活動事例や、ぽむぽむ通信の感想・ご意見をぜひお寄せください

世界の子供たちで紹介しているイラストは、広報誌等で活用いただけます。組合員活動部までお問い合わせください。

次号は、3月15日発行です。

お楽しみに！

ハンド・イン・ハンド中央大会のお知らせ

下記の日程で実施予定です。

日時： 2005年12月23日(祝)13:30~14:30

場所： 恵比寿ガーデンプレイス・センター広場

有名人やお相撲さん、アカペラグループなどがご協力いただける予定です。皆様もぜひお立ちよりください。



2004年ハンド・イン・ハンドのようす

ユニセフ*コープネットワーク ぽむ・ぽむ通信

No.30 2005年12月15日発行

編集 グループ ぽむ・ぽむ

スタッフ・編集/尾澤・谷杉・浜崎・福本・藤森・
松本・山本・林田・北村・茂垣

イラスト/蛸沢

発行 日本生協連 組合員活動部

〒150-8913

東京都渋谷区渋谷3-29-8 コーププラザ 11階

TEL03-5778-8124 FAX03-5778-8125

ホームページ <http://www.jccu.coop/>